

書評

吉川徹 著
『現代日本の「社会の心」』
(有斐閣, 2011年)

直井 道子*

I 全体の構成

本書は、戦後日本の社会意識の推移をデータに基づいてたどり、それに依拠して、現在から将来の社会意識の動向を「大きな物語」として組み立ててみようという極めて野心的な1冊である。

本書の構成を示すと、第1部ではこの課題に取り組むための理論と方法が示される。これまでの社会意識論において明快なストーリー化が可能だったのは、近代社会が持っていた階層(上一下)と(伝統一近代)という二つの補助線を利用していたからだとして、その変化をたどることを本書の課題とする。そこで、第2部は1985年を起点としてその後の階層帰属意識がどう変化したか、データを追う。第3部では主として(伝統一近代)に関する意識の変化を分析し、(伝統一近代)の階層帰属意識への効果が減少してきたことを確認した上で、解釈を交えながら未来の方向を見据える、という構成である。以下の書評は、著書の最初から順にあらすじを追うが、小見出しIからVIIまでは私が主張したいコメントである。なお、「著者」とは本の著者吉川徹を指し、評者のことは「私」と表現する。

II 「社会の心」という表現は適切か

第1部は2つの章からなり、1章はいわば理論編、2章は計量社会学編である。これらは3章以降のた

めの準備のための型どおりの作業かと思いきや、理論編は社会意識論を社会科学の中に位置づけようとした力作である。最初に社会心理学と社会意識論の違いは次のように説明される。両者は個人のデータを集めて態度や意見の全体像を把握する点では同じだが、社会心理学は人間行動の一般命題を求め、社会意識論は社会の実像を把握する方向に関心がある。そして、社会意識論は社会学の個別の領域(家族社会学、労働社会学などの)で研究されている各領域の意識(家族意識、労働意識など)に作用している社会意識を把握して、それを社会的要因で説明しようとする。その場合には、特定の理論のエートス、アイデンティティ、イデオロギーなどの概念が用いられることもあるが、社会意識とはその上位概念であるという。そして、実証研究においては、操作概念として〇〇意識、〇〇感、〇〇的態度などが特定の文脈にとらわれずに使われているとする。この見解は、現状の社会学の混沌を明快に表現してうまく整理したものと評価できる。

ただし、一つだけ1章で私が抵抗感を持ったのは「社会の心」という表現である。「社会の心」という用語からは、デュルケームの集合意識、すなわち、外在性と拘束性をもって、個人にプレッシャーとなる「社会的事実」が連想される。そのために、著者が目指す「方法論的個人主義によって計量社会学的に測られ集積された個人意識の全体像」とは違ったイメージを与えてしまうのではないだろうか? そのためもあって、この書評では

* 桜美林大学大学院老年学研究科 特任教授

「社会の心」は使わずに、一貫して社会意識論という用語で通したいと思う。

なお、第2章は「計量社会意識論の作法」と題しているが、計量社会意識論の一般論というよりは、むしろ、本書の計量社会学的部分をこのように遂行するという著者の宣言である。宣言されているのは、社会構造（個々人の社会的属性）を独立変数として社会意識（従属変数）を説明すること、主に現代日本社会を対象とすること、縦糸としての時代性、横糸としての階層性が織りなす地平を論じるということなどである。なお、記述統計にとどめず、「計量的モノグラフ」を目指すことも宣言されている。より具体的には、複数の社会的属性を独立変数とし、社会意識を従属変数としたOLS（最小二乗法、以下この部分を省略）回帰分析を主に用いるとしている。著者は社会学的分析の場合、一般的にその説明力（決定係数 R^2 ）はせいぜい20%ほどで、これは社会学の場合には完全理論化を目指すというよりは、因果的な説明が及ばない部分がどうしても混入するからだとしている。決定係数がこのくらい小さくてもいいのだ、というこの宣言に、これを気にしてきた多くの社会学者は（私も含めて）よくいってくれたと思うのではないだろうか。

III 85年以前のデータ分析がほしかった

第2部は、本書が対象とする2つの焦点、階層（上—下）と伝統—近代についての社会意識が、1985年から2010年までどう変化したか、時点ごとの比較によって論じている。著者は現在の日本を再帰的近代に位置づけ、いわば「第一の近代」から再帰的近代への移行という枠組みの中でこの変化をとらえている。

第3章では、なぜ1985年を起点としたか、1985年はどういう時代であったか、について詳しく論じられている。1985年の日本はまだ色濃く戦前・戦中世代の影響下にあり、西欧を近代をモデルとしていた時代から日本人の独自性を肯定的にみる「日本人論」に移っていった「第一の近代主義」に埋め込まれていた最後の時代と位置付けられてい

る。

第4章では、この枠組みを念頭に置きつつ、データ分析に入る。過去（1955-2010年）のSSM調査を見ると、階層帰属意識の分布は1955年、65年、75年の間ではっきりした上昇を見せたが、75年から2010年までほとんど変化が見られない。そこで、問題は1) 1955年から75年までの変化「中への集中」をどう説明するか、2) 75年から85年以降分布にほとんど変化が見られないことをどう説明するか、という2点となる。

私の不満は、この二つの問題に対してかなり異なったアプローチがとられていることだ。75年までの「中への集中」の説明は、「回答選択肢の変更による偽装」と「日本の特殊性論に見られた国民的自画像」の二点に求められている。前者は提示カードが縦書きから横書きに変わったとか、選択肢に55年だけ注が付いており、その影響ではないかなどという主張である。後者は、自分たちが豊かに経済発展してきた姿に学術的認証を受けたい気持ちという意味で、日本の特殊性論と一億総中流論は共に「国民的自画像」であり、個々人は自分たちの階層的位置づけが曖昧なまま、世間一般を準拠集団としてそれに同一化していったという説明である。

この二つの説明についてはそれぞれ疑問がある。提示カードの変化についての指摘は確かに目新しいが、その結論として「中意識は偽装だった」とまでいえるのだろうか？ 私はまったく一般論としてだが、自分の想定と調査結果が異なった場合についてのみ、調査方法の影響を論じて解釈することには非常に違和感がある。それなら、自分の想定と結果が一致している場合にも、調査方法の影響を検討すべきではないか？ それをしないのなら、調査の結果は結果としてそのまま受け止めるべきではないだろうか。もちろん、同じ設問で調査をしながら、なぜ10年後に選択肢を変更し、またその形式を変えたのか、この点は猛省されなければならない。

また、国民的自画像説については、実感レベルと先行研究レビューについてと二つの違和感がある。実感レベルでは、（私はその時代に社会学研

究をスタートしたので鮮明な記憶がある) 多くの人々は階層帰属意識などにあまり関心を持っていなかったと思う。マスコミは大きく取り上げたが、このテーマに本気で関心を寄せた人々の反応は、むしろ岸本の「中流の幻想」に近く、幻想だとするものが多かったように思う。また、先行研究のレビューについては、これまでの階層帰属意識に関する議論が十分に踏襲されていないことに不満がある。とくに「中」と中流意識はちがう、ということは〔岸本(1978)、原(1989)ほか〕レビューで一応引用されているものの、それをふまえてはおらず、「総中流現象」などという言葉が安易に使われている。

このような不満の根底には、著者が75年までの階層変数の効果については統計的な分析をせず、「自分たちの階層的位置づけはあいまいなままに世間一般に同一化した」と結論付けたことがある。先行研究をたどれば、75年までは学歴や所得の構成変動の効果はなかったものの、耐久消費財の保有による暮らし向きの変化の効果はあった、とする私の初歩的な分析〔直井道子(1975)〕や、高学歴化が階層帰属意識の上昇効果を持ったとか〔数土(2011)〕、所得階層によって中への集中度合いが違うという結果もあり〔盛山(1990)〕、必ずしも「階層的位置づけがあいまいだった」とはいえない。この時代の「中への集中」について、著者は「昭和のキーワードが役割を終えた」と述べており、それゆえ詳細なデータ分析には関心を持ってなかったのかもしれないが、せめて75年からのデータ分析に入れてもよかったのではないか。そうすれば、4章の解釈はもっと説得力を持ち、また5章では85年以降との比較が興味深かったのではないかと感じた。

Ⅳ 階層リテラシーとは何か？

5章では、主に85年以降、客観的階層変数と主観的な階層帰属意識の関連がどう変化したのかに焦点を当てた分析が行われる。具体的には、社会的属性を独立変数、階層帰属意識を従属変数とした回帰分析によって、どの変数の効果が大きいのか

を見ていく。そして、1985年には、階層帰属意識に対して世帯年収、学歴、職業、性別などの効果が認められるが、2010年は、学歴、職業の効果が上昇していて、客観的階層変数の決定係数が2.5倍になっている、とまとめている。そして、これを著者は「階層リテラシーの増大」のためだとしている。すなわち、階層帰属意識の分布の変化は少ないが、その「決まり方が変化した」という解釈である。

この指摘は刺激的なものであるが、私の不満は「階層リテラシー」とは何かということが具体的にデータ分析によってはあまり論じられていないことである。一般論としては、階層の全体像を知り、階層を位置づける基準を明確にして、自己の所属階層を位置づけるという3段階の能力を意味するのだと思う。だが、これまでの研究〔高坂ほか(1990)〕はこれらが矛盾に満ちていることを示している。むしろ、ふだん交流がある、自分に近い階層の人々を基準にして主観的な全体像を描いている場合が多いのではないとも考えられる。

この点に関して私が著者の慧眼に感心したのは、「豊かさが劇的に拡大していた時代には自分の相対的地位は重要ではなかったが、社会の変化がなくなると地位アイデンティティが見えやすくなった(p.134)」という指摘である。これと、階層基準はしばしば過去のイメージにあるという指摘〔盛山(1990)〕や、1975年までと85年以降で階層基準が変化したという指摘〔神林(2011)〕を合わせて考えると、「中」への集中も安定もかなり説明がつく。このように階層基準について詳しく分析すれば、階層リテラシーの内容がかなりあきらかになったのではないだろうか。本書とほぼ同時に出版された本の内容まで持ち出している注文になったのは一種のルール違反ともいえるが、階層リテラシーという用語が魅力的であるだけに残念に思い、あえて欲張りな注文を書いた。

Ⅴ 伝統—近代主義の退役を測る適切な項目についても議論を

6章では伝統—近代という軸が社会意識につい

ての説明力を失ってきたことが分析される。社会意識の伝統性を測る尺度として著者は権威主義的尺度に注目し、その関連要因が1985年から2005年までどのように変化したのかを分析した。男性に関しては、1985年には年齢、学歴、職業と権威主義の間に強い関連が認められたが、2010年には決定係数は4分の1になり、学歴の効果が若干残っているのみになる。1985年頃には、高学歴化によって生年世代効果と学歴効果が相乗的であったことも特記されている。女性もほぼ同様な傾向がみられるが、2000年代には、むしろ若い女性の方が権威主義的でさえあるという。

次に伝統性を測る尺度として、性別役割分業意識が登場し、これについても、著者の分析では学歴、年齢、職業などが効果を持っているが、しだいにその効果は減少してきている事が示された。しかも、若いほど「内外」の分業に賛成である傾向さえ読みとれる。これらを著者は「伝統-近代意識の静かな退役」と称している。

ふだん高齢者のデータを主にみている私はこのような変化には気づいていなかったもので、この「発見」には大変感心した。ただし、社会意識の中にある伝統-近代をどの尺度で測るのが適切なのか、もっと議論があってもよかったと感じた。権威主義的尺度については全世界で共通に用いられている尺度だと説明され、これは納得できる。しかし、性別役割分業意識については近代家族の存立基盤であり、近代社会に不可欠の要素として取り込まれたという説明で、わずか2項目の尺度である。私は性別役割分業意識は当事者の利害によって賛否が左右される（例、フルタイム既婚女性は分業に反対）論点であり、社会意識を説明するための伝統-近代の軸にすえるのはやや不適切ではないかと思う。伝統-近代の軸と相関性はあるが、それなら、老親との同別居、高齢者扶養、墓参り、などやや類似した論点が他にもありうるのに、性別役割分業2項目に絞った理由は何だろうか？ データの制約といえればそれまでだが、それならあえて触れなくてもよかったのではないか？

VI 主義なき時代？

さて、7章からあとの著者の執筆態度はそれまでと少し違う。ここまでは社会意識に対する階層の規定力の増大と伝統-近代の効果の減少という二つの傾向を丁寧なデータ分析で示してきたが、7章以降は、これからの社会意識はどういう方向に行くのか、大きなストーリーを描こうという態度に傾いている。この大きなストーリーをここで論じるには紙数も足りないので、以下ではそれを簡単に紹介し、私の感想は括弧の中で述べるにとどめたい。

まず、7章では、階層規定力の増大と伝統-近代の効果の劣化という二つの動向の両方を同時に説明する変数を求めて、(ややアットランダムに)不公平感、格差観、「向社会的」などのデータを検討している。結果としてどれも説明力不足であるとして退けられ、著者は現在は「主義なき時代」に入ったのではないかと問いかける。ここで、著者は(やや飛躍がある感じもするが)「心理学に起源をもつ態度尺度とは異なる様式で」、すなわちブルデュー流の文化的活動の頻度に着目する。ここでは壮年大卒層と若年非大卒層の間に大きな開きがみられるが、著者はこれを、「〇〇主義」を介していない自己目的的な、すなわちコンサマトリーな選択である、としている。

8章では日本社会の「第一の近代」が終わり次の段階の到来が市民レベルで実感された1990年代初頭から最近までの変化をQOLという視点から見たいこうとする。QOL志向とは「便利さや快適さよりも環境保護を優先させる」とか「時間やコストをかけても健康を維持する」などの態度だとする。(このテーマは重要で興味深いだが、しかし、なぜここでこのテーマに移行したのか、著者はこれまでのような明晰な説明はしていないように思う。)

さて、これらの意識とその関連要因は18年後どのように変化したか？ 環境意識、健康維持意識について共通に言えることは1992年には権威主義が持っていた負の効果が2010年には消え、かわって生活満足度が効果を持つようになったことであ

る。どうやら1992年には伝統—近代という軸の影響を受けて権威主義が健康維持や環境保護に影響していたのに、この枠組みが崩れ、生活満足度が高い人がより質の高い生活を追い求めるといった形に変化したと解釈されている。これを著者は「再帰的近代における個人化」という枠でとらえ、大きなストーリーを締めくくろうとする。

結論として(終章)、著者は、本書の成果として地位アイデンティの明晰化、伝統—近代主義の無効化、社会的オリエンテーションのコンサマトリー化の三つをあげている。

私には、結論の三つの成果は、とりあえずは二つの成果と一つの将来見通しに見える。しかし、これまでの社会意識論がともすれば調査結果の提示、関連要因の分析にとどまっていたところから、果敢に将来見通しに踏み切ったこと、それもややアドホックながらデータ分析を伴っていることは、高く評価してよいだろう。

Ⅶ 最後に

このように、本書はち密なデータ分析と、将来についての大きなストーリーとを含む、なかなか魅力的な本である。しかも、著者の文章はなかなか「読ませる」ところがあり、読んでいてひきこまれていく。それと表裏一体なのか、ときどきは首をひねるような表現(例、億千万の胸騒ぎとし

ての総中流、社会のどこのネジをどのくらい巻けば「社会の心」が変わるのかなど)もあるのだが、その刺激とひっかかりがまた読者の探究心を誘うだろう。著者が前書きで述べた、「面白いだけの社会意識についての印象論にとどめを刺し、面白さと確かさのバランスをとる」という目標は、かなり成功したといえる。私も、これまでこんなに熱心にまた興味深く思いながら書評をしたことはない、ということをお告白しておこう。

参考文献

- 原純輔(1990)「序論—階層意識研究の課題」, 原純輔編『現代日本の階層構造② 階層意識の動態』, 東京大学出版会, pp.1-21。
- 神林博史(2011)「中流意識と日本社会」, 盛山和夫ほか編『日本の社会階層とそのメカニズム』, 白桃書房, pp.151-184。
- 岸本重陳(1978)『中流の幻想』, 講談社。
- 直井道子(1979)「階層意識と階級意識」, 富永健一編『日本の階層構造』, 東京大学出版会, pp.365-388。
- 盛山和夫(1990)「中意識の意味」, 『理論と方法』, Vol.5, No.2, pp.51-71。
- 数土直紀(2011)「高学歴化と階層意識の変容」, 斎藤友里子・三隅一人編, 『現代の階層社会③ 流動化の中の社会意識』, 東京大学出版会, pp.17-45。
- 高坂健次・宮野勝(1990)「階層イメージ」, 原純輔編, 前掲書, pp.47-70。
- 吉川徹(1999)「中意識の静かな変容」, 『社会学評論』, Vol.50(2), pp.216-230。

(なおい・みちこ)